



埋蔵文化財 愛知

no.48



清須城の石垣



清洲城下町遺跡

清須城本丸推定地の発掘調査で、清須城の内堀に相当する部分と石垣および胴木・杭列・栗石などの下部構造施設などが確認できた。また内堀からは、軒瓦・道具瓦・鬼瓦・鯨瓦など瓦類が大量に出土している。

(Ⅱ頁参照)

遺跡調査速報

おおわき
大脇城跡

豊明市栄町梶田 愛知県埋蔵文化財センター

伊勢湾岸道路・第二東海自動車道路建設に伴う事前調査として発掘調査が行われている大脇城跡は、尾張と三河を国境とする境川の一支流である正戸川右岸の平坦な沖積地に位置する。

今年度7,200㎡の調査で検出された遺構は、16世紀後半～17世紀前半にかけての溝・井戸・掘立柱建物などである。特に幅2.5m前後・深さ1.6m前後の「堀」は、断面の形状が戦国期の城館に特有の「薬研堀」状を呈している。

大脇城について記す文献資料の一つである『寛文村々覚書』（1670年前後に編纂）には「古城跡 先年梶川五左衛門居城之由 今ハ畑成」とある。城主の梶川五左衛門は、16世紀中頃～末の武将であり、今年度の調査成果と特に矛盾するものではないが、17世紀前半の遺物がまとまって出土するという点には留意する必要がある。

出土遺物は、大多数をしめる土器・陶磁器の他に、はばき・ナタなどの鉄製品や三方・俎などの木製品、銭貨など多岐にわたっている。

(埋文セ 中野良法)



調査区全景



遺物出土状況（ナタ）

きよ すじょうかまち
清洲城下町遺跡

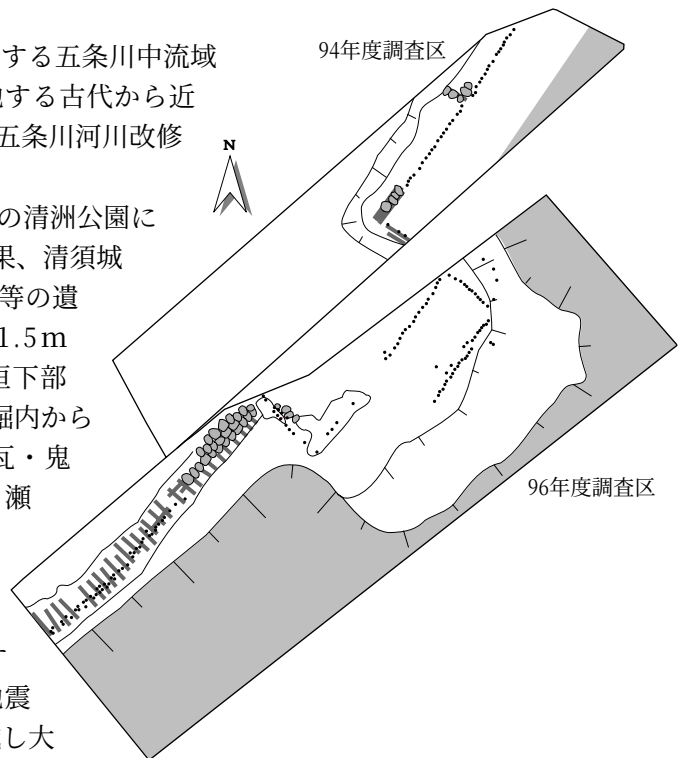
西春日井郡清洲町 愛知県埋蔵文化財センター

清洲城下町遺跡は、濃尾平野の中央部を南流する五条川中流域に形成された自然堤防上とその後背湿地に立地する古代から近世にかけての複合遺跡である。今年度の調査は五条川河川改修に伴う事前調査として実施した。

調査地点は清須城本丸推定地にあたり、現在の清洲公園に近接した五条川旧堤防下に位置する。調査の結果、清須城本丸東側に築かれた石垣、テラス状遺構、杭列等の遺構が確認できている。石垣は長さ約10m、高さ1.5mの範囲で残存し、胴木や杭列、栗石などの石垣下部構造施設が長さ約35mに渡って検出できた。堀内からは多量の瓦が出土し、瓦の種類も軒瓦・道具瓦・鬼瓦・鯰瓦など豊富である。さらに土師器皿、瀬戸・美濃産の陶器や木製品・石製品なども出土している。

これらの遺構は、『清須村古城絵図』（蓬左文庫蔵）に描かれている本丸南東隅に相当するものと考えられる。また今回の石垣は天正地震による噴砂と重複し、天正14年（1586）に入城し大改修を行った織田信雄の時代に築造された可能性が高い。

(埋文セ 原田 幹)



調査区遺構配置図

はちおうじ 八王子遺跡

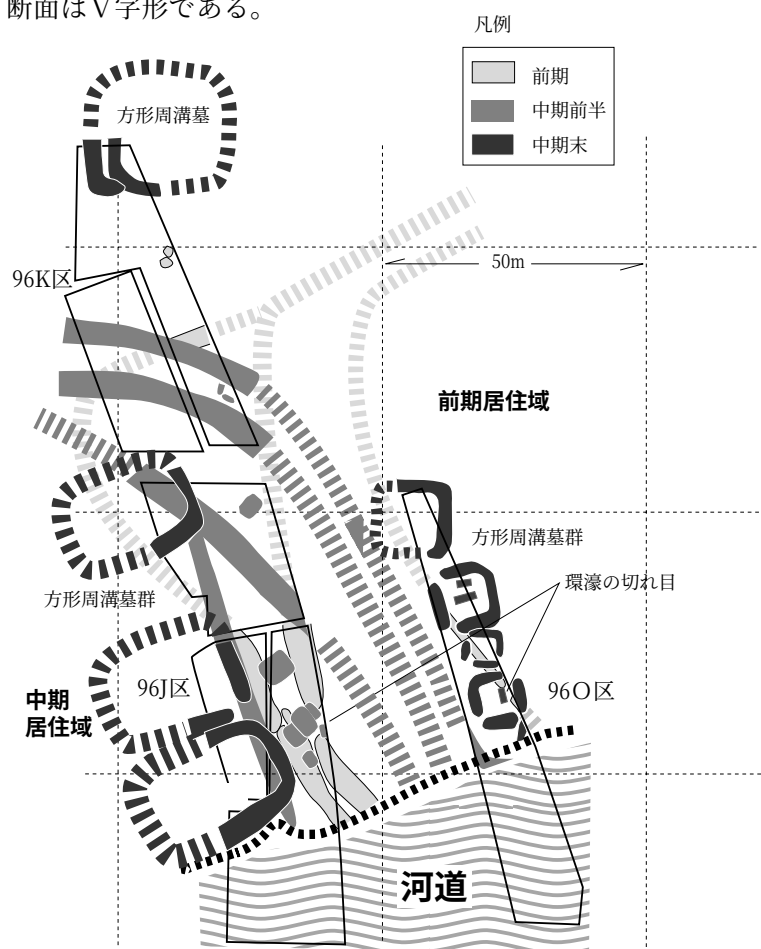
一宮市

愛知県埋蔵文化財センター

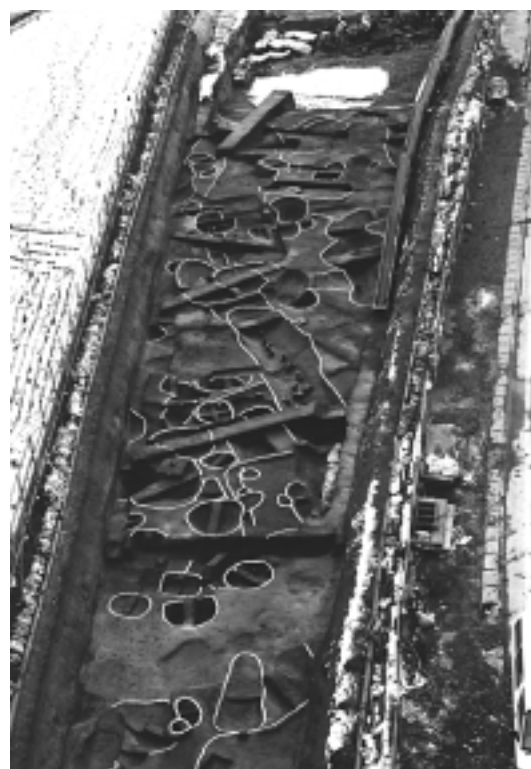
八王子遺跡は、日光川流域の標高5～6mほどの自然堤防上に立地する遺跡である。昨年度の調査によって、弥生時代前期から鎌倉・室町時代までほぼ途切れることなく営まれた遺跡であることが明らかとなった。しかし遺跡の性格や自然環境等の外的要因によって、いくつかの画期が設定できる。ここではその内で、八王子遺跡の成立に関係する弥生前期～中期に関してまとめておきたい。

弥生前期は、昨年度の調査で環濠が確認でき、本年度は96J区で西側の環濠がさらに北へ延びる点と、96O区でも幅約2m、深さ約0.7mで北西から南東に延びる溝をあらためて検出した。主としてこの溝より東側に弥生前期の遺構が集中している。そのため、昨年度の調査で想定した弥生前期の居住域を変更し、96O区の溝が弥生前期の内環濠と考えて、居住域はこれより東に展開しているものと判断した。

弥生中期前半～中葉には、弥生前期の居住域の西側に新たに居住域を設けている。昨年度の調査で確認した2条の環濠と合わせて3条の環濠が集落を巡ることが明らかとなった。規模はいずれも幅約5m、深さ約1.5mで、断面はV字形である。



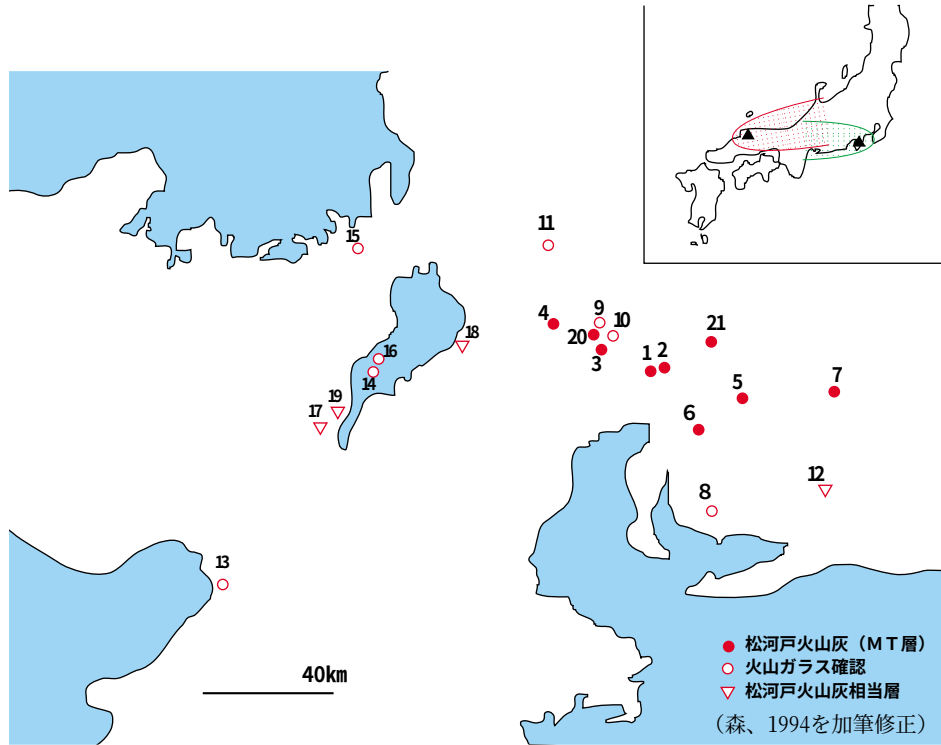
弥生時代遺構配置図 (1:1500)



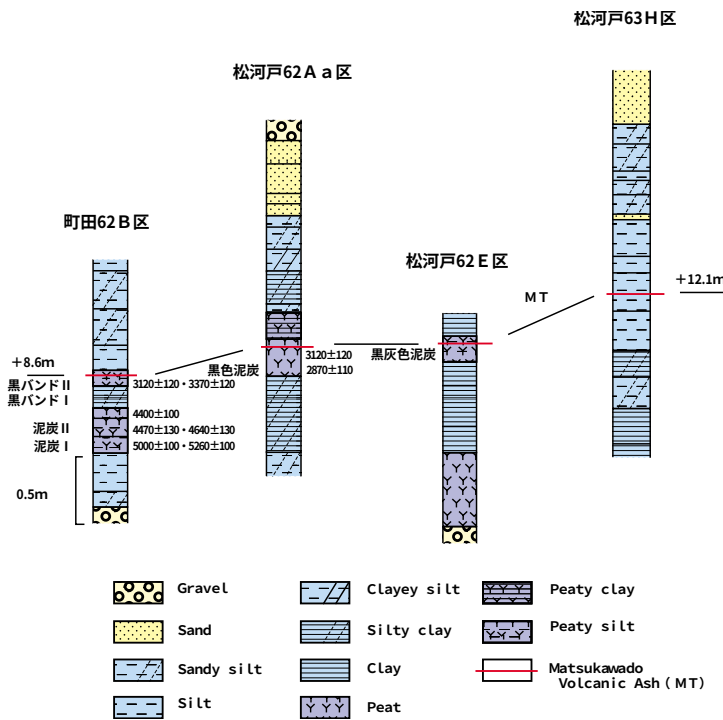
96O区 弥生前期遺構面 (北から)

ところで中期末葉には、この時期としては全国的にも有数のきわめて大型の墳丘墓が展開する。また、西尾張中央道をはさんだ東側の96O区でも4基の墳丘墓を検出し、西尾張中央道西側の墳丘墓に較べてマウンドの遺存状況が極めて良好である。埋葬施設は北から2番目の墳丘墓で2基、最も南の墳丘墓で1基検出できた。西尾張中央道の西に展開する3基の墳丘墓がいずれも一辺10mを超える大型のものと想定され、しかも散発的に配置されているのに対し、96O区の墳丘墓は、1基を除くといずれも規模が小型で比較的密集して築かれている。この時期の居住域は現在のところ不明だが、地形的に西の方が高く、96J区の墳丘墓の溝からは多量の土器片とともに厚い炭化物層を確認していることから、調査区のさらに西に展開している可能性が高い。

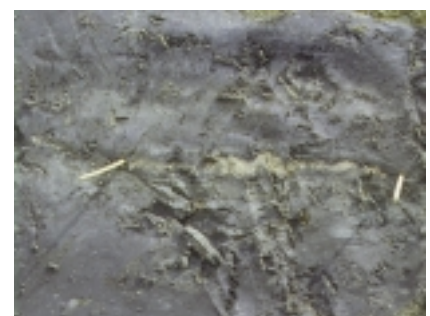
(埋文セ 樋上 昇)



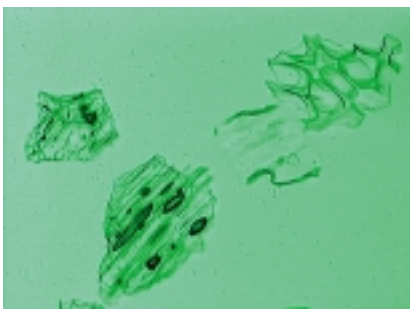
松河戸火山灰 (MT) およびその相当層の確認地点



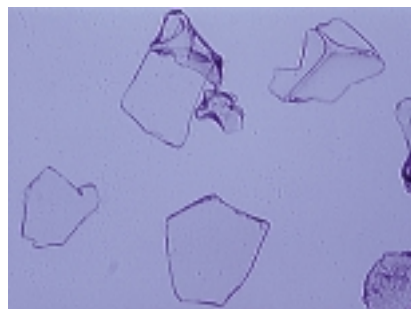
松河戸火山灰層を含む主な調査区における地質柱状図
(森、1994)



松河戸火山灰層の産状 (八王子遺跡)



MT (松河戸) 火山ガラス



A T (始良) 火山ガラス



K-A h (鬼界-アカホヤ) 火山ガラス

まつかわど
松河戸火山灰 (MT)

松河戸火山灰は、鬼界ーアカホヤ火山灰 (K-Ah) より新しい時代の広域火山灰である。春日井市松河戸遺跡を模式地とし、町田遺跡や春日井市南部の沖積低地で広く分布が確認されている。

火山灰としての肉眼的特徴は、①桃灰色～桃褐色を呈していること、②火山ガラスにより光を反射してキラキラ輝いて見えること、③厚さは数mm～せいぜい2 cmで連続性に乏しいことなどが上げられる。

顕微鏡下では、多孔質な火山ガラスを主体としており、始良Tn火山灰 (AT) や、鬼界ーアカホヤ火山灰 (K-Ah) とは容易に区別がつく。

【松河戸火山灰の年代】

松河戸火山灰の放射性年代は、松河戸・町田両遺跡における測定値より3120年前頃と推定される。考古遺物との関係は、町田遺跡で火山灰層下位より縄文時代中期末の土器片、上位からは縄文時代晩期の土器片が、また松河戸遺跡では、下位より縄文時代中・後期の土器片が、上位からは弥生時代中期の土器片が出土している。豊田市三本松遺跡においては、縄文時代後期末から晩期初頭の土器を多数出土する層中に松河戸火山灰が見いだされたが、遺物との層位的関係は明瞭にはできなかった。考古遺物との層位的な関係は今後さらに詳しく追求する必要があるが、現在までに判明している放射性年代と考古遺物との層位的関係からは、松河戸火山灰の降灰時期は縄文時代後期・晩期の境界付近といえよう。

【松河戸火山灰の分布】

松河戸火山灰が確認できる地点を遺跡、湿原、ボーリングコア採取地点などを含めて図に示した。愛知県では濃尾平野の低湿地遺跡、具体的には一宮地域の山中、西上免、八王子遺跡や、三河山間部の三本松、上品野遺跡、さらには湿原などあらゆる条件での検出例が増加してきた。また、たとえ肉眼で確認できなくても、西尾市岡島遺跡や一宮市馬見塚遺跡のように顕微鏡レベルで火山ガラス濃集層を探すことも可能である。このことは松河戸火山灰の鍵層としての有効性を強調するものであり、存在を意識すれば検出できる可能性が高いことを物語っている。

【松河戸火山灰の噴出源】

さて火山灰として肝心の噴出源についてもふれなくてはならないであろう。だが残念ながら松河戸火山灰はテフラ研究の進んだ現在でも給源が明らかにされていない。日本付近では通常偏西風の影響を受けることから、森ほか (1990) は、火山灰の鉱物組成、放射年代より山陰 (三瓶・太平山降下火山灰) に起源を求めているが、西田ほか (1993) は、特殊な気圧配置により伊豆半島 (カワゴ平パミス) から運ばれた火山灰であるとしている。

噴出源の特定は地質学的な問題であるが、その謎を解明するための鍵の1つは噴出時期を考えれば遺跡の発掘調査が握っていると言わざるをえない。今後、松河戸火山灰の検出例が増加すれば、縄文時代後・晩期の考古編年に留まらず火山灰そのものの謎を解きあかすことにもつながろう。

(埋文セ 服部俊之)

松河戸火山灰

はちおうじ
八王子遺跡出土の線刻人面が
描かれた鳥形木製品

一宮市

愛知県埋蔵文化財センター

八王子遺跡960区の河道より多量の木製品が出土し、その中に鳥形木製品が含まれていた。長さ9cm幅3cmを測り、厚さ3mmほどの板材を加工したものである。両面には細かい線刻が見られ、特に一側面には鳥形の体部から頭部にかけて人面が描かれている。刀子状の鋭利な道具によって滑らかに描画され、目の表現と目尻から延びる三条の線、及び顔全体に描かれたと思われる弧状の表現などは、東海地域に点在する土器に描かれた線刻人面と共通するものである。線刻文と鳥形の関係は、線刻の状況を重視する限り、線刻文が描かれた板材を再加工して鳥形を作り出したように見られる。なお共伴した土器からは、所属時期を廻間Ⅰ式期の中で考えていくことができる資料である。また表現・描画の特徴からも線刻人面として初源的な要素をもつ資料である。



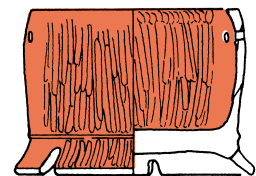
(埋文セ 赤塚次郎)

ごうす
朝日遺跡出土の土製合子

西春日井郡清洲町

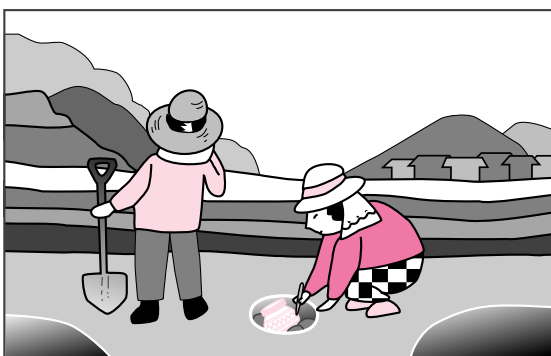
愛知県埋蔵文化財センター

今回紹介する合子形土器は、朝日遺跡96年度調査区で検出された弥生時代中期末から後期初頭の方形周溝墓群の周溝底より出土している。この調査区は貝殻山貝塚に南接した地点で、その他弥生時代前期から中期の溝や貝層、埋葬人骨などが検出されている。合子形土器は口径8.2cm、高さ6.5cmを測り、平面形が円形をなす。口縁端のやや下には2孔1対の孔があり、脚部がやや外にひろがり5方向に切り込み状の透し孔がみられ、底部外面と脚端部を除いた部分には赤彩がなされている。類例としては岡山县百間川兼基遺跡より出土した弥生時代後期の1例あるのみで、本例はきわめて稀少なものといえる。また、弥生時代から古墳時代にわたる副葬・供献品を考えるうえでも重要な事例になるものと思われる。



合子 1/3

(埋文セ 宮腰健司)



埋蔵文化財愛知 no.48



発行 平成9年 3月31日

編集 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

〒498 愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田字野方802-24

TEL 0567-67-4161~4163 FAX 0567-67-3054

印刷 クイックス